ごんぎつね（読みの速さに変化を加える）

同じ速さでずらずら平らに読むと、棒読みになってしまいます。つまらない読み方になってしまいます。文章内容によって、読みの速さに変化をつけると、場面の様子や、人物の気持ちが生き生きと声に現れ出るようになります。

ある文章部分を速く（おいこんで、たたみかけて）読んだり、ある文章部分をゆっくり（おそく、のろく）読んだりすると、人物の動き・気持ちの変化が声に現れ出るようになります。

次の太字の文章場面で考えてみましょう。

兵十は追いかけます。ごんは、いちもくさんに逃げます。

ふたりの素早い行動を、読み声であらわします。早口読みをすると、その様子が声に出ます。

ただひたすらに、ずらずらと早口読みをしては、何を語っているか、聞き手に分かりません。

早口で読んでも、意味内容の区切りで、短い間を入れて読むと、意味内容が分かるようになってきます。

次の太字の文章個所の（　　）の中は、せかせかした、すらすらの早口読みにします。

（　　）と（　　）とのあいだの○個所では、ほんのごく短い区切りの間を入れて読みます。

すらすら読みの中の、ほんのごく短い間ですよ。そうすると、素早い行動が読み声に現れ出てきます。

（そのとたんに兵十が、向こうから

「うわあ、ぬすっとぎつねめ。」

とどなり立てました。）○

（ごんはびっくりして飛び上がりました。）○

（うなぎをふりすててにげようとしましたが、

うなぎは、ごんの首にまき付いたままはなれません。）○

（ごんは、そのまま横っ飛びに飛び出して、一生けんめいに

にげていきました。）○

次は、前文太字の直後に続く文章部分です。ここの文章の全体は、ゆっくり、ゆったり、のんびりと読み進めると場面の様子や人物の気持ちが声に出ます。○は一つ分の間です。○○は二つ分の間です。○○○は三つ分の間です。

前文太字のすらすら読みにあった○と比べて、ここの一つ分の○は、長めにあける間あけになります。

ほらあなの近くの　○　はんの木の下で　○　ふり返って

みましたが、○○○○　兵十は　○○　追っかけては　○

来ませんでした。○○○

ごんはほっとして、○　うなぎの頭をかみくだき、○

やっと外して、○　あなの外の

草の葉の上に　○　のせておきました。○○○

「ふり返ってみましたが」の下で、ごんがもう平気と判断した時間の間をたっぷりと四つ分あけています。ここまでくれば、もうだいじょうぶ、平気だ、とごんは判断します。後ろをふりかえって、だいじょうぶと判断した時間の経過の間を、たっぷりと四つ分あけています。